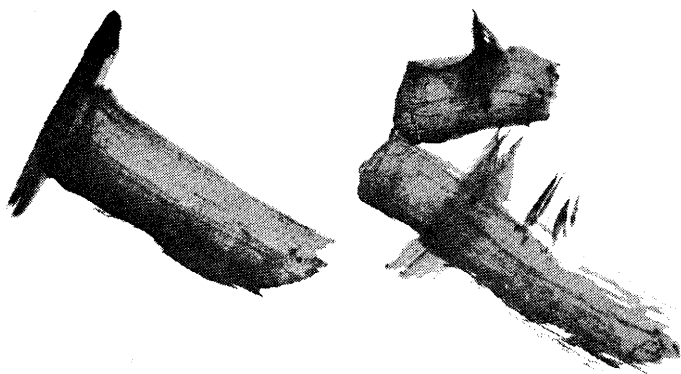




第三五号



1989-

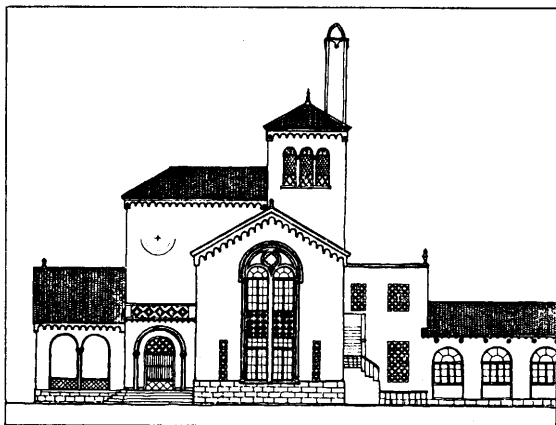
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第三五号

1987年12月—1988年12月

も く じ



随想

ただもう長かった三十年

キング宣言

研究所で拾った石器

講演

夏期講座

音声多重テクスト——文学における叙述の方法（平田）／

文学と歴史の方法（佐々木）／陸世儀の心性論（三浦）／コッ

トン・ロード（森）／「ノリ」ということば——能楽での

用法と現代的用法（藤田）／現代に語り継がれるマハーバー

ラタ（田中雅）

開所記念講演

五四運動と労働者——中国労働運動史の起点（江田）／日本

近世社会における武家の官位（藤井）／ノアの子孫の食卓

——旧約の語りの意味分析（谷）

退官記念講演

一般意志——神意から民意へ

ボードレールの詩を読む

共同研究の話題

近世史と近代史の対話をとおして

行歴僧伝とイスラーム史料

「諸宗教の比較論的研究」班に参加して

旅

アメリカ港町雑感

晋東南の寺廟めぐり

サルダーナとの出会い

書いたもの一覧

おくりもの（21）・計報（21）・人のうごき（21）・外国

人研究員・招へい外国人学者・外国人研修員（23）・東洋

学文献センター講習会（24）・講演会（25）・お客様（26）

ただもう長かった三十年

尾崎 雄二郎

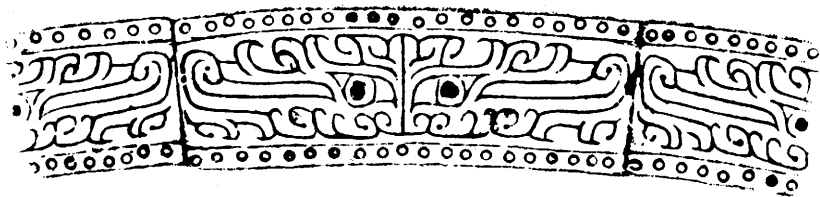
非常勤時代を入れるともっと長くなるが、専任としては立命館大学文学部専任講師二年の勤めを終えたあと、一九五九年四月十六日、教養部講師に配置換になってからの三十年、正確にはそれに半月足りない期間であった。配置換というのは、京都大学に関してはすでに非常勤講師という「官職」にあったかららしい。

三十年というのは、当時、つまり、これから三十年と思った時、すでに「気の遠くなりそうな」長さであった。先輩同僚の中には退官の段階でほとんど四十年という方がたもおられた。私のは三十年といっても、京大での在職すべてでということ、研究所はその半分足らず十四年であるに過ぎない。

それでも長かった。

充分堪能した、と思えるほど長かった。四十年の長さを、同じ一つの部局の中で過される方がたの長さを、私は恐怖が先に立って、感覚しようという気が起らない。

ならば十六年つとめた教養部ではどうであったか。



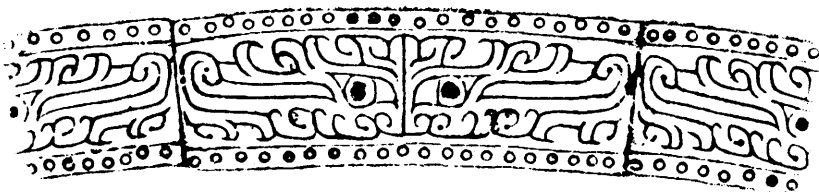
もちろん充分に長かった。

教養部に専任となる前の立命館が二年であつたために、教養部で二年を過ぎたあたりから、学年が終りに近づくと、毎年々々、ほかの場所にいる私を想像し、そうして失望した。毎年それを繰返した。

いわゆる大学紛争は、いろいろの事がありながら、かえつて私の、この、外に出たがり病を、治療はしてくれないまでも、なだめる役にはだけは立つた。

在職三十年、私が外に移ることを強くは求めなかつた時期は、この紛争以後の数年だけであつたといつてもいい。紛争ということばをあえて使うように、この運動に対する同感が私の中にあるわけもないのだが、何だかあれとあれ以後の数年を、懐しい気持ちで想い起こす自分自身を否認するわけにも行かない。学生との対立を楽しんだのか。

ついこの間、この私の中にある懐しさを口にした途端、お宅にはもう騒動がないから、と、ぴしゃり二の口の継げないようにしてくれた教養部の古い友人があつた。申しわけもないこと、私はただ黙って懐しがつていればよかつたのである。紛争で京大がいやになつたといひながらよそに移つて行く同僚を、奇異の感で見送つた何度かを想い出す。京大をいやと思わせる学生たちなら、紛争前から探すに決して苦勞はなかつたのに、と。



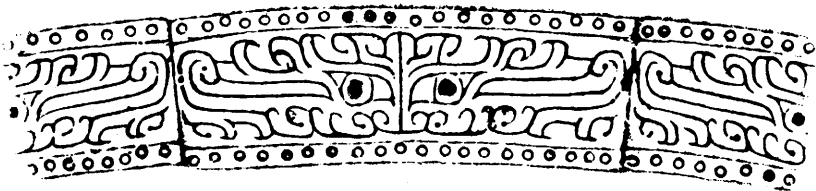
キング宣言

中 村 賢二郎

数年前、自然科学系学部の教授をしておられる高等学校の先輩から手紙をいただいたことがある。私の書いた高校同級生の追悼文がその目にとまっていたことであつた。昨年また同じようなことが機縁になつて、手紙の往復を重ねることになった。

その方は、「学問的能力とは自問自答能力である」といい切るだけに、自問能力が豊かである。その自問能力は専門外のことにとも發揮され、自答できなければ質問魔と化して人を悩ませることになる。昨年いただいた手紙では、印刷になつた御自身の文章に関連して、いくつかの歴史に関する質問が連ねられていた。

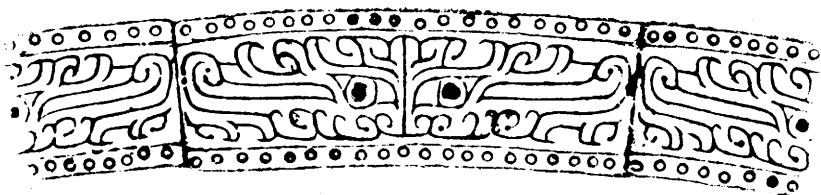
その文章は昔の天皇名についての疑問を解く内容であつたので、私への質問もヨーロッパの皇帝に関するものが多かったが、たとえばその中のひとつは次のようなものであつた。ヨーロッパでも皇帝になると姓が消滅して名だけで呼ばれるようだが、シーザーが姓で呼ばれるのは皇帝ではなかったからか、そうであればヨーロッパの皇帝第一号は誰だつたのか。



ヨーロッパ史でも専門外の分野のこととなると私の知識はきわめてあやふやである。ラテン語での皇帝の称号がインペラートル、アウグストゥスのいづれであるか、自答能力をもたぬ私は、ローマ史の専門家に電話を入れて、返事を書くはめとなった。そのおり、中世最初の皇帝であるカール大帝が何と称したのが気になって調べたところ、ローマの皇帝と同じくアウグストゥスだったのは意外であった。しかし西ローマ帝国の復興者を自任するカールがローマの伝統に忠実だったのは、べつだん不思議ではないのかもしれない。

別の質問は、天皇は現在では世界で唯一のエンペラーのようであるが、欧米での天皇の呼び方はエンペラーなのか、キングなのか、というものであった。それにも自答能力をもたぬ私は、ドイツ滞在中のわずかの経験を伝えるとともに、いま必要なのはむしろ天皇が「キング宣言」をすることではないか、と答えた。キングかエンペラーかは当の国が決めたことで、外国はそれにならうだけであると書けば、もつと説得的だっただろうに、とはあとになって気付いたことである。

平成の世に変わりたいま、「キング宣言」の必要性をいつそう強く感じている。



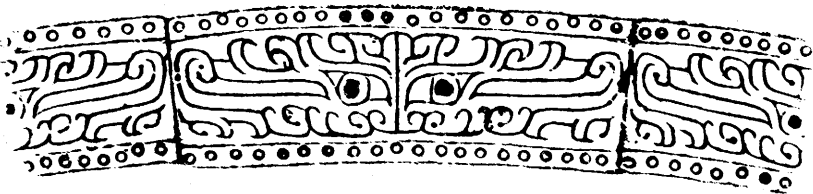
研究所で拾った石器

林 巳奈夫

ずっと前から研究室の机の前の棚に石が三つ置いてある。研究所で拾った石器だ。もう十年以上にもならうか。

私の研究室は建物の東北の角に近く、西南の方にある便所に行くのには中庭を斜めに突切ることが多い。塔の下便所に近い廊下のドアは、さういふ人のためにいつも開けてある。ドアの入りぎは、日蔭で薄くなった芝生に、お握りほどの大きさの灰色の石が一つ転がってゐるのが何となく気になってゐた。おや石器かな、と思って目をくれながら、そんなはずもない、といつも通りすぎてゐた。或る時思ひ立って拾ひ上げてみた。不規則な六面体で面は粗く調整され、一面は円味を帯びてたいた痕がある。その面を外に向けて握り、一、二回向きを変えてみると、指の腹と掌がぴたと石に当る方向がある。物をたたきつづための叩き石だった。考へてみればこの研究所の東一五〇メートルほど向ふが昔の北白川遺蹟だったさうだから、この辺の石器が転がってゐても不思議はないのだ。

それから幾らも経たない内に、似たやうな叩き石をもう一つ



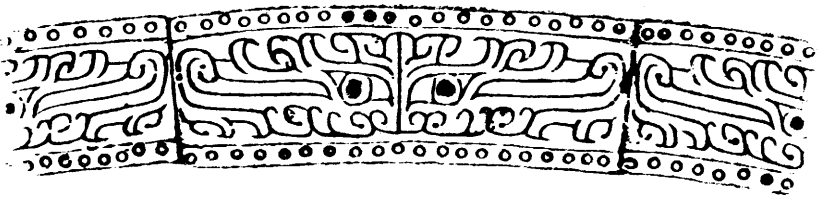
拾った。考古学研究室の東側のドアを出て焼却爐の方に歩いてゐた時見附けたものだ。樋から溢れた雨水に洗ひ出されて転がってゐた。それから暫く経ってまた一つ拾った。今度は研究所のピラカンサの植った土手の上だ。北白川小学校のバス停を降りて出勤の途中だった。これは前の二つの半分ほどの小さなものだ。子供用に違ひない。

子供「面白さう。僕にもやらせて」

親父「だめだめ。この叩き石では大きすぎる。お前用のを一つ作ってやるからお待ち」

といった石器時代の親子の情景が目につく。

この石器をどうしようか、記念にもらつて行かうか、それとも資料として研究所に残した方がよいだらうか、などと考えるこの頃だ。



講演



夏期講座（昭和六三年度）

八月一日～三日
於 本館会議室

音声多重テキスト

文学における叙述の方法

平田由美

たとえば夕食のテーブルについて家族と談笑しているとき、もしテレビがついていたら、われわれは家族の話を聞くことと平行してテレビ・ニュースにも耳を傾けていることができる。これはもちろん、われわれが音そのものの特徴の他に音の聞こえてくる方向やそれとの距離など、音に付随するさまざまなものを区別しつつ、それら複数の音を認知しているため可能なことである。

書かれたものとしての文学テキスト、とりわけ物語

や小説といったミメシスの文学にもまた、現実世界と同様のさまざまな音声描写される。しかし音声言語を文字言語として写し取ったテキストには、基本的について音調や音の発生する状況、すなわちその方向や強さ、時間的な分布といった音の物理的特徴が捨象されていて、テキストの表面には一連の文字が行儀よく並んでいるのを見るのみである。

しかし実際は物語世界としてのテキストには種々のレベルにある音声記録されている。作中人物の会話やそこでの物音、作中世界の状況や事件を叙述する人物（これは作中人物の一人であることもまた作者自身であることもある）の声、作中人物の心中での思考、あるいは物語世界の外側からその世界について解説し論評する人物の声などなど、虚構世界には幾種類もの声が層をなして存在している。カギカッコをはじめとするパンクチュエーション記号、あるいは表記上の工夫は、これら異なったレベルにある複数の音声を互いに弁別するものとして機能するメタ・テキスト的要素である。

日本文学における区切り符号の登場は、近世中期に遡りうるが、それは近代文学の成立に重なり合うようにして発達してきた。作者と読者の間に交わされた文学の生産を享受する伝統的な了解事項が崩壊したあと

に現われた作家たちには、表現主体として取りうるあらゆる方法、すなわちテクスト世界の音声を叙述するすべての位置が開かれていた。

読本作者風全知全能の語り手、推理小説の探偵のごとき限定された視点の持ち主、ハードボイルド小説においてしばしば見られる記録機械のような叙述の方法。近代以後の文学テクストにおける音声の多様化は、このような叙述主体の複数化と密接な関わりを持っている。

文学と歴史の方法

佐々木 克

沢木耕太郎は、ノンフィクションとは何か、ということ問い続ける作家である。ノンフィクションの方法は、歴史のそれと似ている。取材すなわち、歴史の場合における史料集めからまず出発する。沢木の発言は鋭く、時として酔うほどに共感を覚える。彼の作品を「地を這うような取材」の成果である、と誉めた者があつたが、沢木は、その様な取材の態度は当然のことではないか、と言い切つて喜ぼうともしない。私は彼のそうした自信に、ほとんど羨望に近いものを感じ

る。

大江健三郎の「政治少年死す」(『文学界』一九六一)と沢木耕太郎の「テロルの決算」(『文芸春秋』一九七八)は、いずれも、六〇年安保の年の十月、社会党委員長浅沼稻次郎を刺殺した右翼少年の山口二矢について語つたものである。純文学として書かれた大江の作品は、政治にも思想にもほとんど深い関りもなく、ただ行動右翼へと走つた、マスターベーションにふける劣等感のカタマリ少年「オレ」の告白物語として完結している。一方、沢木は、少年の日常を克明に取材し、モンタージュを作るように、少年の等身大の姿を再現する。たとえば、テロルの直前に、デパートの食堂でフルーツ・サンデーを食べる少年の姿を淡々と描くように。こうして、アンポの年を疾走した少年を見事なことに、沢木は歴史の断面を鮮かに描き切つたのである。しかし大江は、少年を文学の素材としてながめただけであつた。

個人の知見などたかがしれている。だから歴史家が「通史」を書くのは傲慢だ、と沢木は言う。私にとつてはツライ言葉である。沢木の方法は、無数の「煌くようなフラグメント」を集め、それだけしかない「一瞬」を再現することである。地を這うような営みは、そのためにある。沢木と同じ、と言い切る自信はない

が、私も地を這う姿勢は持ち続けていたいと思う。しかし、おそらく沢木が切りすてる薄汚れた退屈なフラグメントを、「一瞬」のためにではなく、歴史の脈絡の中にはめ込んで行くために、私はうつむいて拾い集める作業を続けて行くのである。

陸世儀の心性論

三 浦 秀 一

万暦から天啓、崇禎へと明朝末期の治世は、満洲族などによる辺境の圧迫や国内各地での農民反乱、更には朝廷内の主導権争いによりきわめて安定性を欠いていた。万暦三十八年、江蘇太倉州に生まれた陸世儀（一六一一—一六七二）は、かかる情況下、世の中を治める主体たるべき儒者としての使命感に燃え、古典の研究とおした自己の人格の陶冶と地域社会の運営への積極的な参加とを果たす。これらの活動は一定の成果をおさめるのだが、明朝はその命運も尽き、かわって清朝が中国を支配する時代を迎えることになる。清朝が中国全土を制圧するのは順治末年のこと、世の中の急激な変化をまのあたりにして、世儀は反清朝的感情を抱きながらも直接的な行動を起こすにはいたらない。

しかし、儒者としての使命感は抑えがたく、これまでの自己の営為を「体用の学」としてまとめあげ、それにもとづいて地域社会の人士育成に力を注ぐ。とりわけ、その心性論すなわち人間理解は世儀の学問の中核をなしていたのである。

世儀の心性論は、順治末年ごろ、朱子学流の性善説に対する批判的観点を形成するにいたって、彼独自のものとなる。人間も他の存在も同質の善なる本性を天の命令として等しく賦与されるとする朱子学流の性善説に対して、一切万物の本性はそれぞれの具体的な氣質形体によって規定されるのだから、善なる本性を備えているのは人間だけであり、他の存在はそれらにふさわしい、たとえば馬には健、牛には順といった本性が備わっていると考えたのである。このような考察は、当時において、一切万物のあるべき姿を一義的な価値判断から規定しようとする世界観からの脱却という意味をもつとともに、現実の人々に対してはその氣質に即した新たな倫理性を要求する思想であった、と見做せるであろう。

人間の本性を氣質に即して捉えようとする場合、朱子学流の考え方にしたがえば、悪に陥る可能性をも人間の本性として認めることになる。しかしながら、世儀は、その可能性を悪としてではなく人間本性の本来

的な幅として考え、そうした本性を「尽くす」ことを唱える。つまり、過不及あることを人間本性の常態であるとして、その本性を後天的な学習によって完成させようとするのである。社会的秩序の混乱した時代に際会して、旧来の世界観を克服しつつ秩序の建直しをはかろうとする一知識人の誠意が、ここには認められるのである。

コットン・ロード

森 時彦

現代が石油の時代とすれば、十九世紀から二十世紀前半は棉の時代だった。世界経済の指標は棉にあった。この棉の流れから、中国近代における綿紡織業の展開を辿ってみたい。

開国（一八四二年）前後の中国には、最高で年に一二〇万担（一担＝六〇キログラム）ものインド棉花が輸入された。当時四億人の毎年消費する綿布は六億匹にのぼったが、その原棉六四〇万担の内、二割が輸入品だった。国内でも商品経済の発達につれ、農作物の特化がすすみ、棉産地から非棉産地への棉花の商品流通量は、全消費量の三割をしめた。顕著な例では、江

蘇、湖北から揚子江をさかのぼって四川へ移出される棉花は、最盛期には年に五〇万担をこえた。

「男耕女織」のことが象徴するように、中国の在来綿業はすべて農村の副業的な家内手工業だった。個々の生産は微細な手仕事であったが、総体としては最初に産業革命を完了した大ブリテンの一八六〇年の生産高に匹敵する規模に達した。手織された六億匹の綿布は、半分が自家用、半分が商品用だったと推定される。

自給自足の自然経済と小商品生産のむすびついたこのような在来の生産システムは、海外からの工業製品の流入とともに動揺しはじめる。植民地工業として勃興したインド紡績業は、手紡糸に代替しうる太い機械製綿糸を中国へもたらした。このインド綿糸は、まずインド棉花の代替品として非棉産地の華南を席卷したのち、圧倒的な低コストを武器に、一八九〇年代には棉産地にも浸透した。一八九九年、機械製綿糸の輸入高は二七五万担にセまった。商品用綿布の原糸から手紡糸がほぼ駆逐された勘定になる。その分、余剰となった原棉は、別の消費先を求めて流れをかえた。

一九〇四年を例にとると、インド棉花の流れは、新興綿工業国の日本へ向きをかえた。揚子江をさかのぼっていた湖北棉花も、逆に六〇万担も上海へと下り、

ここで江蘇棉花と合流し、一二五万担もの流れとなって日本へ向った。

二十世紀初頭には機械製綿糸の巨大な消費市場と化した中国農村をめぐって、インド、日本さらに一八九〇年以降、上海を中心に勃興した中国紡績業が、三つ巴の角逐をえんじた。第一次大戦期に莫大な超過利潤をえた日本紡績業は、綿糸輸出競争でインドを敗退させたのち、さらに中国紡績業とのコスト競争にそなえるため、大戦後には大挙して生産拠点を上海および青島へ移転した。中国へ進出した日本資本の紡績工場（在華紡）は、資本、技術、原棉手当などの面で、中国資本の紡績工場（民族紡）を圧倒し、一九二〇年代半ばには中国の全紡錘数の約四割を占有した。

日本紡績業の対中国戦略が商品輸出から資本輸出に転じたことで、棉花の流れはまた大きく変った。一九二六年でいうと、一九五万担にのぼるインド棉花の流れが再び中国にもどった。揚子江をくだって上海にとどく中国棉花は二二五万担にもふえたが、多くは上海で消費され、日本までいくものは少なくなった。さらに七〇万担の米棉も上海へ輸入されるようになった。

三つの時期の棉花の流れは、それぞれの段階の中国綿業のあり方を如実にうつしている。

「ノリ」ということば

——能楽での用法と

現代的用法——

藤 田 隆 則

ノリという言葉は最近の流行語の一つであるが、その指示対象は必ずしも明確ではない。一方、能などの古典芸能においては、この言葉が専門用語、つまり明確な指示対象をもつ言葉として使われている。この報告では能の謡の用語である「大ノリ」をとりあげて、ノリの良い状態が演奏の中でどのように組織されているかを簡単に、ノリという言葉の意味を考えなおしてみたい。

謡には二つの異なる種類の拍がある。一方は、謡の音韻などの一つ一つに与えられた長さを規準とする「ことばの拍」であり、もう一方は、均質に進行するパルス的なものとして理念化された「拍子の拍」である。大ノリとは、この二つを一对一に合わせるうたい方であるとしたか、一般的には説明されていない。

ところが、うたい手が大ノリをうたう過程においては、二通りの拍が同時に措置された上で両者の結合がおこなわれるのではない。ことばの拍の正確な長さを

再現した発音がその内部に拍子の拍をはらむ。そして今度はその拍子の拍が枠組となつてことばの拍の一つ一つの長さを規定していくという相互関係の過程が認められる。具体的には、音韻一つ一つが同じ長さに規定された一文節（「そ・の・と・き」）が拍子の拍子四つのまとまりとしても同時に認知され、それが後続することはの拍のまとまりを位置づける。後にある「お・し・へ・だ・て」という五つの音韻の文節が拍子の拍四つの枠組の中にはめこまれる。こうしたノリの過程は、能動的にリズム構成をしながらも、同時にそれが受動的な性格をおびざるをえないという主体のあり方を意味している。

打楽器奏者も、自分に固有の音素材からパルス状の拍子の拍を生みだしてそれに規制される点で同じである。能全体の大ノリ部分の演奏で、うたい手も含めた各奏者はそれぞれ異なる独自の音の組み立て方をしてゐる。したがって、つくりだされる拍子の拍のパルスは理念的には共通したものであつても、実際には互いに微妙なずれを生みだしつづける。能におけるノリの良さは、上演中の奏者一人一人が他の奏者を規制することにむけて主体的に拍子の拍を示し、一回の上演のあるべき規範を提示しあうことによつて保証されている。能におけるノリという言葉は、発音行為や身体動

作というそもそも規範の成立しにくいところにおいて、互いがその場において通用するはずの規範を提示しあう状況を指していると言えよう。

現代に語り継がれる

マハーバーラタ

田 中 雅 一

マハーバーラタはラーマ・ヤナと並んでインドの二大叙事詩のひとつと言われているもので、サンスクリット語で書かれた十八編十萬頌の詩句より成立する。その成立年代は紀元前四世紀より紀元後四世紀までの約八〇〇年の間に徐々に今日伝えられているような形を取るようになったと言われている。その中心となる話はパーンダヴァ五人兄弟とカウラヴァー一〇〇人兄弟というお互いにイトコの関係にある集団間の王位継承をめぐる対立である。ドラウパディはパーンダヴァ兄弟の共通の妻として登場する。そしてかれらとともに苦難の道を歩むが、最後には壮絶な戦いの後、パーンダヴァ兄弟の長兄ヨディシュトラが王位に就き、ドラウパディも女王となる。

しかしマハーバーラタはたんなる古典として今日に伝わっているのではない。マハーバーラタのヒロイン、

ドラウパディーは南インドの言語のひとつであるタミル語を母国語とする文化圏では神格化され、特に村の女神として人々の信仰を集めている。ここではスリランカで観察することのできたドラウパディー女神を祀る村の祭祀を紹介したい。

スリランカの国民はシンハラ語を話す多数派の仏教徒とタミル語を話す少数派のヒンドゥ教徒に分かれる。タミル地域にはいくつかのドラウパディー寺院を認めることができる。そのうちのひとつ、D村のドラウパディー寺院では毎年七月から八月にかけて大がかりなお祭りが行なわれる。祭りは一日間続き、そのあいだマハーバーラタが霊媒によって唱読され、また重要な場面が村人たちによって演じられる。祭りのクライマックスは火渡りである。これは女神の化身となった霊媒によって先導され、一〇〇〇人近くの信者たちが参加する。

村人たちのかわる儀礼の性質を分析すると、それらが願掛け端を発していることが理解される。すなわち、人々はなんらかの不幸に苦しんだ後、ドラウパディー女神に祈り、それが除去されたのを感謝して火渡りやマハーバーラタ劇に参加しているのである。したがってその参加の動機はきわめてまじめなものであって、遊びとしての参加ではない。このように、今日の

現代スリランカにおいては、マハーバーラタとそのヒロインであるドラウパディーは人々の信仰生活に深く入り込んでいるのである。同じことは、南インドやシンガポールなどの他のタミル文化圏にもあてはまる。そして、ドラウパディー女神信仰に認められる信仰の本質は、特定の神への信心と、それに応える神の恩恵による救済というバクティ（献身）の思想である。

開所記念講演（昭和六三年度）

一〇月二七日
於本館会議室

五四運動と労働者

——中国労働運動史の起点——

江田 憲 治

一九一九年五月四日の北京学生デモにはじまる反帝民族運動・五四運動が、画期的な歴史的意義をもつとされる要因のひとつに、上海における労働者の大規模な政治ストライキがある。ここでは「労働運動史における五四運動の意義」の視角から、五四運動において上海の労働者がどのようににたちあがり、その後どう運

動を展開するのか、について考察をこころみた。

まず、五四前夜の時期にあつて上海の労働者は、経営側の労働組織の変更や物価上昇などを背景として、紡績工場、煙草工場などでストをおこしていた。もちろん、これらの闘争は非組織的なものであり、このころ労働組合的組織は存在しなかった。ただし、一九一六年から一七年にかけては中華工党という組織が活動しており、その指導者沈若仙は賃金制度の廃絶、ゼネラル・ストライキによる共産主義社会の実現などアナルコ・サンジャリズムを宣伝していた。そして、沈若仙はこの五四前夜の時期に活動を再開する。

一九一九年五月、五四運動は上海において日貨ボイコット運動を中心にはじまり、一部の労働者もこれに参加する。だが、六月五日、すでにはじまっていた学生ストに加えて商店ストがはじまると、まず印刷工・機械工がその影響をうけてストを開始した。さらに、六月七日から八日にかけて紡績や煙草などの不熟練工のスト（約二万人）と、八日の機械や印刷、電気工などの会議のスト突入決定が、スト拡大の突破口と橋頭堡となった。そして、この七日に沈若仙ら中華工党は宣言を発表して「強権」との闘争、ストをよびかけていたのである。かくして上海のストは九日には全面的ストへと拡大、それは運動の当面の目標であつた親日

派三官僚の罷免を実現させる。

このストは第一に労働者の政治的意志の表明という点での政治スト、第二に自発的ストの連鎖・拡大としての大衆スト、というふたつの性格をもっていたといえる。だが、このストからまず組織的に結集することで成果を結実させたのは、工頭や熟練工など上層労働者であつた。五四以後に成長しあるいは成立する中華工業協会などの労働団体は、実業発展による救国を主張するブルジョア民族主義路線をとつた。これに対して労働者大衆は、賃上げを主要な内容とするスト運動を展開する。そこにみられるストの連鎖的拡大や工場間の連合ストなどの大衆ストの様相、および労働者組織の進展は、五四以後の労働者の階級的成長を示すものであるといえる。

すなわち、五四運動以後の上海労働運動には、上層労働者のブルジョア民族主義路線と労働者大衆のスト運動のふたつの層があつた。ただ、両者にはともに「労働者を解放する思想」が欠如しており、そこで注目されるのが、沈若仙らアナルコ・サンジャリストである。かれらは五四運動以後も、労働者大衆を結集し、その利益擁護のための活動を継続する。それはなお小規模で短命なものであつたが、その運動論と課題はのちのマルクス主義知識人へとひきつがれるのである。

日本近世社会における

武家の官位

藤井讓治

日本の古代律令制社会において採用された位階・官職はその実体を失いながらも、江戸時代の武家社会に存在し、ある機能をはたしていた。しかし、その実態についてはほとんど明らかではない。一六六四年の時点での武家官位制についてみると、まず、武家で官位を持つているものはわずか五一九名であり、全武家人口の〇・〇三五パーセントに過ぎず、武家の官位制が、近世社会ことに武家社会の成立にあたつて、武家全体を秩序化する制度として構想されたものではなかったといえる。

つぎに、武家の官位制は、少なくとも領知高による武家の序列を補強する機能、一門・譜代・外様等の身分階層に即した序列化の機能、幕府職制における諸職を序列づける機能の三つの機能を持っており、前二者の要素は、昇進制とともに大名身分とりわけ一〇万石以上的大名においては顕著であり、後者の要素は、役付き大名・旗本についてより明確に現れるが、この三者が相互にからむ中に武家官位制の実体があったとい

える。

さらに、官位叙任にあたつては領知高の大小に官位の高さ、初叙任官位、初叙任年齢等が概して相即するが、幕府職制秩序化の原理が入り込むところでは、この相即的關係は成立しない。また、一門・譜代・外様といった身分階層上の特質として、一門が官位叙任にあつて最も優遇され、次いで譜代が優遇されている。すなわち第二、第三の点から、近世の武家官位制は、武家身分の序列を形成する領知高・身分階層・職といった各要素が相互に持つ矛盾を一定程度解消する機能を持ったといえよう。

近世の武家官位制は、実態面で古代律令制の官位制と大きく乖離していただけではなく、官位相当、使用位階の限定性、官職名の使用法等の点で、形式的側面においても、律令制の官位制をそのままの形では踏襲しておらず、武家独自の官位制に改変している。この点は、武家の官位叙任権が將軍の手にあり、朝廷の叙任文書はそれをオーソライズするに過ぎなかったという点とも併せ、武家官位制の独自性を示すものといつていいであらう。

ノアの子孫の食卓

——旧約の語りの意味分析——

谷 泰

イスラエルの民の民族神話、旧約には、神の人に対する食規定に係わる語りが記されている。その内容は、供犠儀礼の意味附けのみか、かれらの民族的存在の位置附けにも係わる。その言説は、三つの段階的なステージに分けられ、相互に対立した転回を示す。

エデン時代、神は、人に動物の管理を委ねるが、植物食のみを認める。

楽園追放以後の農耕者カインの牧羊者アベルの殺しは、そねみを介して動物殺害から人間殺害が生ずる物語りだが、ノアの洪水の伏線となっている。この洪水伝説は周辺他民族も共有している物語りだが、旧約では食規定が特異的に附加されている。そこで神は、人間の罪性に絶望し、止むを得ぬこととして、血のままで食べぬこと（ひいては供犠儀礼の執行）を条件として、全動物（肉）食を容認する。それは人に罪性の烙印をおしたのちの、許容である。ノアの子孫、人類はその後増え、生業も含めて、文化的に分化する。

第三の食規定はレヴィ記、つまり分化した一民族、

イスラエルの民が地上権力によって忌むべき存在とみなされる経験、そしてそれからの解放、出エジプト以後に語られる。それはイスラエルの民に語りかけられ、可食性が大幅に制限されている。獣類は反芻偶蹄類、鳥類は非肉食鳥、魚類はひれと鱗のあるもの、虫類はイナゴ類以外のものが忌むべきものとされる。この規定の産出原則は、メアリ・ダグラスの分類の中間者排除の視点、ユージン・ハンの分類の自然的基礎の視点から十分説明できない。また、肉食獣を含め、血をくう者の忌み原則はあるものの、それだけでは、ロバ等草食獣排除が説明できない。規定の語り口分析が示すことは、牧民的イスラエルの民の食現実を肯定し、それを一般的規則とする指向性であり、しかも規定末尾に神は、出エジプトを導いた神として、「あなた方を聖となすための規定を与える」と述べている。こうすることでイスラエルの食現実から外れる他民族を忌む者とし、イスラエルの民を清い者とする道が開かれることになっている。

旧約の「食」についての語りはこうして、まず一般的なかたちで、罪のコムプレックスをうめこんだあと、特定の集団の生活現実を肯定するような原則を立てて清いものとし、他に優越した選民としての意識を与え、かれらを忌むべき者とみる地上権力から、かれらをし

て神の權威の側に引きつけ、儀礼を強制的に受容させる力をもつ。そのような語りの力をもつものとして、旧約の「食」についての語りは構成されている、と考へたい。

退官記念講演

昭和六三年三月一七日
於 本 館 会 議 室

一般意志

—— 神意から民意へ ——

樋 口 謹 一

王権神授説をふまえる絶対王政から人民主権論にもとづく国民国家への転換は、神から人間への歴史主体交代に対応していたが、これを神意から民意への転換として辿ったライリー『ルソー以前の一般意志』に拠りつつ、空間の世紀Ⅱ一八世紀のもつ意味を探りたい。マールブランシュは、すべての人間の救済こそ神の一般意志であるとし、原罪以後、救済を人間の一部に限る特殊意志は恣意的な恩寵Ⅱ奇跡とせざるをえないから、これをほとんど認めなかった。

たちまち大論争が起こり、ボシユエ、ペイルまで巻きこんだ末、マールブランシュの理神論は啓蒙思想の大前提となり、これをふまえて一般意志の非神学化Ⅱ政治化が進む。

第一歩はデイドロ、その『百科全書』での項目「自然法」は、マールブランシュをほぼそのまま踏襲しつつも神をカッコに入れた。つまり、一般意志の対象としての全人類は維持しながらその主体をも人類へと変えたのである。だが、いまだ「道德化」の色彩が強く、政治化はあまり進まなかった。

この政治化を大きく進めたのはモンテスキュー『法の精神』であった。法一般は地球上を支配する人間理性で、その適用の特殊ケースである各国民の法を支配するのは「一般精神」である、としたのであった。

そして、妥当領域Ⅱ最適空間としての国民国家は踏襲しつつ、客体の知から主体の意へと力点を移し、空間的諸関係の布置と調整（Ⅱ一般精神）に代えて時間

軸にそつた意志の行使と変革（Ⅱ一般意志、全人民の意志）による幸福の実現をうちだしたのが、ルソーにほかならなかつた。かくて、フランス革命を媒介項に、一九世紀にはヨーロッパへ、さらに全世界に国民国家が建設されていくこととなる。

このように完成した一般意志における神意から民意への転換は、ついでモンテスキューとルソーをふまえたつ情に訴えるヘルダーの民族精神を、さらに以上三人のいわば「空間的相対主義」を時間軸に移したランケの「歴史的相対主義」をもたらず。そして、この時代精神の担い手たる民族が地球上の空間を移動しつつ交代する過程を通して、世界精神が展開していく世界史を提起したヘーゲル、これを逆立ちとして是正したマルクスという風に、人間主体の歴史がくり広げられていくのである。

ボードレールの詩を読む

多田 道太郎

ボードレールの悪魔主義 *Le diabolisme* と呼ばれてきたものは、キツチュ *Kitsch* の名のもとに解釈しなおしたほうがよい。キツチュの最たるものは、一九世

紀前半のパリで全盛期をむかえたワルツの踊りである。死者を嘲りつつ、「美」よ、君はその上を踏み歩く。

.....

君の傲慢な腹の上で、なまめかしい踊りを踊る。

〔悪の花〕——〔美への讃歌〕

「なまめかしく」とは「色っぽく」 *amouusement* ということである。女の踊りは悪魔趣味というよりは俗悪であり、通俗である。女と一緒に踊っているのは「安っぽい装身具」とである。男と、ではなくきんきらきんのガジェットと一緒に踊っているところにキツチュの屈折がある。彼女の踊りはそれと名指されていないが明らかにワルツの踊りである。 *danse amouusement* はワルツのリズムを忍ばせている。

「小さな老婆たち」〔悪の花〕九一〕にはフランカステイという遊び場、舞踏場があらわれてくる。そこでの呼びものは大衆化したダンスであり、とりわけワルツだった。ワルツは男女抱擁のダンスとして世界最初のものである。一八世紀の終りライン河をこえてパリに侵入してきたワルツは、一八三〇年ごろパリで大流行をはじめた。一对の男女がワルツの小さな輪を描き、小輪たちがホール一杯に拡がってさらに大きな輪を描く。勃興してきた小市民の家族の輪がブルジョア

社会の大輪の花をホールに咲かせるという構図だ。

しっとりした詩として評判のある「夕べの諧調」

（『悪の花』四七）では

音と香りはたそがれの空をめぐる、

愁いのワルツ、ものうい眩暈！^{めまい}

単刀直入にワルツの俗悪がうたわれ、それがめまいをおこすのである。

キツチュとは一九三〇年代のドイツで、通俗だが無視できない、いや通俗だからこそ持つ芸術的衝撃力としてまとめられてきた社会美学の用語である。一八世紀初めの摂政時代の貴族美学を標榜してきた詩人は、じつは「魂の奥処」において新興ドイツのキツチュにおかされ、それとの格闘をにんまり笑って歌ったのである。キツチュの美学が公認されるよりはるか前に、キツチュの侵入、それとの格闘——そして敗戦（プロイセンと、さらにドイツ共和国と）を予言するかのように、ばらばらに破碎される自分のからだを歌う。それが絶唱「おしゃべり」（『悪の花』五五）である。



おくりもの

- 。一九八七年度の財団法人人文科学協会助成金は、中村賢二郎教授の推薦により、井上正実氏『魔女狩り』（共著 教育社一九八三年刊）に対しておくられた。
- 。梅棹忠夫名誉所員は、フランス政府から教育功労章コマンドゥール章を受章（四月四日付）。
- 。太田武男名誉教授は、最高裁判所長官賞を受賞（一〇月一日付）。
- 。山田慶児教授は、『黒い言葉の空間』（中央公論社）により、第一五回大佛次郎賞を受賞（一〇月一四日付）。
- 。上山春平名誉教授は、紫綬褒章を受賞（一一月三日付）。
- 。会田雄次名誉教授は、京都市文化功労者賞を受賞（一一月九日付）。
- 。林屋辰三郎名誉所員は、京都大学名誉教授の称号を授与された（一一月二二日付）。

訃報

- 。桑原武夫名誉教授（八三才）は、四月一〇日逝去。従三位勲一等瑞宝章がおくられた。
- 。岩村 忍名誉教授（八二才）は、六月一日逝去。正四位がおくられた。
- 。笠原茂樹元人文研事務長（六八才）は、一一月一二日逝去。従五位がおくられた。

人のうごき

- 。樋口謹一、多田道太郎（西洋部）両教授は、停年退官（三月二日付）、京都大学名誉教授の称号を授与（四月一日付）。
- 。永田英正滋賀大学教育学部教授は、併任教授（東大部 比較文化研究部門 四月一日）一九八九年三月三一（日）。
- 。谷山正道広島大学文学部助教授は、併任助教授（日本部 比較文化研究部門、四月一日）一九八九年三月三一（日）。
- 。林 武実助手（東大部）は、辞任（三月三一（日）の上、名古屋外国語大学講師に転出）。

。鈴木祥二助手（日本部）は、辞任（三月三一（日）の上、立命館大学文学部助教授に転出）。

。浅原達郎助手（東大部）は、辞任（三月三一（日）の上、神戸商科大学（人文学科担当）助教授に転出）。

。杉山正明助手（東大部）は、辞任（三月三一（日）の上、京都女子大学短期大学部講師に転出）。

。細川弘明助手（西洋部）は、東京外国語大学外国語学部講師に昇任（四月一日付）。

。森 時彦愛知大学法経学部助教授を、当研究所助教授（東大部）に採用（東大部）。

。阪上 孝助教授（西洋部）は、教授に昇任。

。藤田隆則氏を助手（西洋部）に採用（以上四月一日付）。

。小南一郎助教授（東大部）は、教授に昇任（五月一日付）。

。田中雅一国立民族学博物館第二研究部助手は、当研究所助教授に昇任（六月一日付）。

。船山 徹、稲葉 稯両氏を助手（東大部）。

部)に採用(八月一日付)。

。辻 正博氏を助手(東方部)に採用(一月一日付)。

。佐々木 克助教授(日本部)は、教授に昇任(十一月一日付)。

。浅田 彰助手(西洋部)は、一月一日伊丹発、パリに於いて「ヨーロッパの文化的アイデンティティ」に関する国際会議に出席し、社会講造の概念に関する社会哲学的考察についての資料収集を終え、同月一八日帰国。

。横山俊夫助教授(日本部)は、一月二〇日伊丹発、ソウル大学、慶北大学等で韓国の高等教育研究機関における学術交流の実情調査を終え、同月二七日帰国。

。横山俊夫助教授(日本部)は、二月二八日伊丹発、タイ国のタマサート大学日本研究センター、チェンマイ大学歴史学部等でタイにおける日本研究の現況調査を終え、三月一五日帰国。

。新保敦子助手(東方部)は、二月二九日伊丹発、華僑大学、華北師範大学等に於いて華僑教育の現状調査を終え、三月一五日帰国。

。浅田 彰助手(西洋部)は、三月三日伊

丹発、コロンビア大学で近代日本文学に関するセミナーに出席し、三月一六日帰国。

。田中 淡助教授(東方部)は、三月八日伊丹発、南京工学院建築研究所、五台山永樂宮等で古建筑調査を終え、同月三一日帰国。

。岩熊幸男助手(西洋部)は、五月二二日伊丹発、ドイツ連邦共和国のフライブルグ大学で第八回中世論理学ヨーロッパシンポジウムに出席し、同月二九日帰国。

。甚野尚志助手(西洋部)は、ドイツ学術交流会の招請により、六月五日伊丹発、ゲーテ・インスティテュート、マックス・プランク歴史研究所、ケンブリッジ大学等で、ヨーロッパ中世社会史研究及び資料収集を終え、一九八九九月三〇日帰国予定。

。林 巳奈夫教授(東方部)は、六月一日伊丹発、ニューヨークのチャイナインスティテュートで中国古玉器に関する研究資料を収集し、同月二六日帰国。

。宇佐美 斉助教授(西洋部)は、文部省在外研究員として、六月二七日伊丹発、パリ第七大学でフランス近代詩に関する

研究調査、ルーヴァン大学、ロンドン大学で同資料収集を終え、一〇月八日帰国。

。谷 泰教授(西洋部)は、六月二七日成田発、大英博物館、イタリアのアブルッツォ市内及び周辺地域で会話的社交に関する研究調査、ユーゴスラビアのザクレブ国際学会で国際人類学民族学会に出席し、八月二五日帰国。

。山本有造教授(日本部)は、七月一三日伊丹発、延吉市で東北地区中日関係史研究会に出席、吉林市において東北経済史学術討論会に出席し、八月一日帰国。

。田中 淡助教授(東方部)は、七月一八日伊丹発、山東省威海市の赤山法花院遺跡で考古学的調査を終え、同月二五日帰国。

。前川和也助教授(西洋部)は、七月三一日伊丹発、大英博物館でシュメール楔形文字文書の研究を終え、八月一九日帰国。

。田中 淡助教授(東方部)は、八月三日成田発、カリフォルニア大学サンディエゴ校で第五回中国科学史国際会議に出席し、メトロポリタン美術館等で資料収集を終え、同月一八日帰国。

。井狩彌介助教授(西洋部)は、文部省科

学研究費補助金により、八月八日伊丹発、インド国立公文書館でヒンドゥー文献調査、カシミール大学でナーガ信仰調査、ジャンム大学でヒンドゥー儀礼調査を終え、九月七日帰国。

。横山俊夫助教授（日本部）は、九月六日伊丹発、ダラム大学で第五回ヨーロッパ日本学研究会総会に出席し、大英図書館、オックスフォード大学等で資料調査を終え、同月二十九日帰国。

。佐原康夫助手（東方部）は、九月三日伊丹発、徐州師範大学で中国秦漢史研究会に出席し、西北大学歴史系で資料収集を終え、一〇月一二日帰国。

。曾布川 寛助教授（東方部）は、一〇月一四日伊丹発、北京大学、故宫博物院、南京芸術学院、南京博物院、陝西省考古研究所等で、中国美術資料収集を終え、十一月一八日帰国。

。田中雅一助教授（西洋部）は、文部省科学研究費補助金にて、十一月二八日伊丹発、カルカッタ大学、デリー大学、マドラス大学で僧院におけるヒンドゥー儀礼調査をし、タミルナード古文書館、ネルー大学で僧院に関する文献収集調査を

終え、一九八九年二月一六日帰国予定。
。井狩彌介助教授（西洋部）は、文部省在外研究員として、二月一日伊丹発、

ハーバード大学でヴェーダ儀礼とその世界観の研究、カリフォルニア大学バークレー校、ヘルシンキ大学、インドのブネー大学でヴェーダ文献写本資料収集を終え、一九八九年八月三十一日帰国予定。

外国人研究員

。Sepp Linhart ウィーン大学日本学研究所教授

近代日本の都市住民の余暇行動

受入教官 横山助教授

期間 二月一日～九月三〇日

。何 忠禮 杭州大学歴史系助教授

宋代の政治と社会の研究

受入教官 梅原 教授

期間 二月一六日～八月一五日

招へい外国人学者

。夏 剛 中国社会科学院外国文学研究所助理研究員

日本の戦後文学と文革後の中国文学の比較研究

受入教官 荒井 教授

期間 六月三〇日～一九八九年六月二十九日

。Badwell L. Smith カールトンカレッジ教授

水子供養の実態調査および歴史研究

受入教官 横山助教授

期間 七月一五日～十一月三〇日

。馬 安東 杭州大学助教授

日本近代思想の研究

受入教官 佐々木教授

期間 一〇月一五日～一九八九年三月三一日

。宋 彙七 慶北大学教師範大学倫理教育

科副教授

一七、一八世紀の日韓思想史の比較研究

究

受入教官 横山助教授

期間 四月一日～七月一〇日

。廖 育都 中国科学院自然科学史研究所助理研究員

日本における中国医学及び中国医学史

研究の歴史と現状

受入教官 山田 教授
期間 二月六日～一九八九年二月五日

外国人研修員

。Mesnil Evelyn パリ第七大学院生
五代四川仏教と道教絵画

指導教官 荒井 教授
期間 四月一日～一九八九年三月三十一日

。Daniel Marier トロント大学院生
中国女性史の研究

指導教官 礪波 教授
期間 四月一日～一九八九年三月三十一日

。Françoise Botéro パリ第七大学院生
中国先秦文学の研究

指導教官 尾崎 教授
期間 四月一日～一九八九年三月三十一日

。John A. Tucker ロンビア大学院生
荻生徂徠の「弁名」―翻訳と分析

指導教官 横山助教授
期間 九月一日～一九八九年七月三十一日

日
。Marguerite Wells オックスフォード大学院生
新劇における笑い

指導教官 横山助教授
期間 九月二四日～一〇月二三日

。Richard Piorunski フランス国立東洋言語文明研究所博士課程
新情報システムの社会受容にかかわる社会文化的背景

指導教官 谷 教授
期間 一〇月一日～一九八九年三月三十一日

。Sylke U. Schermann ハイデルベルグ大学院生
淮水流域の文化発展と春秋時代の諸地域文化相互の交流関係

指導教官 林 教授
期間 一〇月一日～一九八九年三月三十一日

。Eric Laurent フランス高等社会科学学院生
日本における民族動物学

指導教官 谷 教授
期間 一〇月六日～一九八九年九月三十一日

東洋学文献センター講習会

。一九八八年度漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）
第一期（一〇月三日）

漢学文献処理の諸問題（講演）
大型計算機センター教授 星野 聰
東洋学文献類目の編纂とフォーマット（講義） 都築澄子

データベースについて（講義）
大型計算機センター助手 萩野達也
計算機処理入門（講義） 同 技官 隈元栄子

第二期（一〇月四日）
ALA文字と東南アジア言語処理（講義） 大阪国際大助教授 柴山 守
東洋学文献類目の計算機処理（講義） 大型計算機センター技官 河野 典
学術情報ネットワーク（講義） 大型計算機センター技官 桜井恒正
データベース検索（一）（実習） 第三期（一〇月五日）
計算機入門（講義）

大型計算機センター助教授 島崎真昭
漢字コードの話(講義)

大型計算機センター技官 小沢義明
データベース検索(一)(実習)

第四日(一〇月六日)

エキスパートシステムと情報検索(講義)
大型計算機センター助手大西 淳
学内ネットワーク(講義)

大型計算機センター助教授 金沢正憲

データベース検索(三)(実習)

第五日(一〇月七日)

附属図書館見学

大型計算機センター見学

東洋学文献類目と漢籍目録の電算化

(講義)

勝村哲也

。一九八八年度漢籍担当職員講習会(初級)

第一日(一一月七日)

漢籍(講義)

梅原 郁

四部分類(講義)

滋賀大学教育部助教授

井波陵一

第二日(一一月八日)

目録法(一)(講義)

田中久子

目録法(二)(講義)

田中久子

第三日(一一月九日)

四角號碼と三角編号法(講義)

森賀一恵

実習

第四日(一一月一〇日)

地志(講義)

井上 進

実習

第五日(一一月一一日)

新学書

森 時彦

実習

第六日(一一月一二日)

質疑応答

井波陵一 梅原 郁

森 時彦 勝村哲也

講演会

。一九八八年一二月二三日 於 西館会議室

アンシャン・レژیーム下の血縁と家族

フランス国立社会科学研究院教授

André Burguière

。一九八八年三月二九日 於 西館会議室

ヴィクトリア時代 The Victorian Age

ロンドン大学元総長 Lord Annan

主催 共同研究班「一九世紀の

文明史的研究」

。一九八八年九月二七日 於 西館会議室

ドイツ自治村の歴史的意義

ベルリン大学教授 Peter Blicke



お客さま

二月 三日 国立江原大学校付設人文科学研究所所長

二月 二日 上海社会科学院外事処処員 金 知見

二月 二九日 ノーボスチ通信社東京支局編集課長 陸 一心

三月 七日 中国社会科学院国際交流担当者代表団 S. ツェリニケル

団長 中国社会科学院外事局副局長 王 剛

団員 陝西省社会科学院外事秘書 韓 振乾

広東省社会科学院弁公室外事副主任 李 立

上海社会科学院外事処副処長 周 益政

四川省社会科学院外事秘書長 劉 平齋

浙江省社会科学院弁公室外事副主任 王 保民

中国社会科学院外事局亜非処幹部 傅 禄永

中国青年学者代表団 劉 啓林

三月 二三日 中国社会科学院副秘書長 張 国維

秘書長 同 外事局亜非処処長 張 潘仕

団員 社会学研究所助理研究員 張 宛麗

同 助理研究員 陳 兆銅

政治学研究 政治学研究所助理研究員 胡 新知

哲学研究所助理研究員 石 曉東

政治学研究 政治学研究所助理研究員

マルクス主義毛沢東思想研究所

助理研究員

法学研究所助理研究員

日本研究所研究実習員

北京大学代表団

北京大学副校長

政治学・行政管理系副主任 教授

北京大学政策研究室主任 副研究員

中国人民大学清史研究所講師

北京大学歴史系講師

英国文化センター館長

中国国家図書館訪日団

中国国家図書館館長

同 副館長

館長弁公室主任

業務処副処長

外事科副科長

遼寧師範大学歴史系教授

中国社会科学院歴史研究所代表団

明史研究室主任

南京大学歴史研究所教授

華東師範大学中国史学研究 所副所長

中国社会科学院歴史研究所副所長

同 「中国史研究」主編

歴史地理研究室主任

万 高潮 張 學書 梁 柱男 趙 存生 華 立 牛 大勇 任 繼愈 孫 承鑑 黃 潤華 富 平 周 蓮 韓 一德 劉 重日 張 憲文 盛 邦和 李 學勤 李 祖德 陳 可畏 宋 鎮豪

中外關係史研究室主任

九月五日 中国遼寧省文化庁副庁長 夏 応元

九月八日 中国社会科学院副院長 郭 大順

同 外事局亞非处处长 丁 偉志

一〇月一九日 中国三聯書店総編集長 張 国維

一〇月三十一日 中国社会科学院語言研究所副所長 戴 文葆

一〇月三十一日 遼寧省社会科学学院副院長 侯 精一

同 副研究員 謝 肇華

歷史研究所副研究員 王 桂良

十一月一日 ソ連科学アカデミー付属 張 玉興

東洋学研究所主任研究員

Tatijana P. Grigorjeva

中山大学歴史系副教授・

孫中山研究所副所長 段 雲章

十一月二日 ソ連科学アカデミー付属

東洋学研究所所長 M. L. Titarenko

同 研究員 M. O. Kapralov

十一月三日 中国吉林省延辺歴史研究所所長 韓 俊光



近世史と近代史の

対話をとおして

——明治維新の研究班——

奥村 弘

明治維新、これをどれほどの人が問題にしてきたであろうか。日本史にかぎっても、嫌になるほどの文献を読まなければ研究史整理さえままならない。しかも評価については、戦前から論争的に討議されている分野なのである。戦後も明治維新は同時代の問題として、種々の立場から現在の諸問題と直接重ね合わせて評価されることが多かった。

ところが研究そのものは一九六〇年代を全盛として数がへり、近世史はむしろその成立期を中心に、近代史は明治憲法成立以降を問題にするようになっていく。維新史研究はむしろ細々と進められるという情況が生まれ、危機意識の中で、維新史研究者が、維新时期研究を課題とする明治維新史学会を独自につくらねばならないというところまでおいこまれていく。これが明治維新史研究における七〇年代であった。

八〇年代に入って情況はもう一度変化した。明治維新时期研究が少しづつつえ、ふたたび論議が活発化して

きたのである。そこでの関心のもち方は六〇年代とかなりかわってきている。

第一には高度経済成長以降の日本の現実と西洋近世史・近代史研究の進展による近代西洋社会形成のイメージ転換は、明治維新研究に固定された近代像ではなく、諸矛盾をかかえこみ変化していく構造物としての近代という視角を持ち込むことを可能にした。いいかえれば「近代」に内在的に接近するための維新研究という視角があらわれたように思う。

第二にはそれと関連して、日本社会（政治社会をも含めて）に視点を置き、研究を進めるという視角が明瞭になったことがあげられよう。日本社会の転換点としての明治維新を考える場合、これは従来断絶しがちな近代史と近世史の協力なしにはおこなえない。八〇年代にはいると、近世史における内在的な日本社会の展開過程研究の射程は、維新时期にまで及ぶ。これがあらたな研究視角をささえる基盤となっていく。

以上手前勝手な独断的な整理を試みたわけだが、このような具合であたらしい維新时期の研究は、近代・近世史研究者の対話、元来相互の領域とされていたもののへの両者の強引な進出からはじまるように思う。近世史研究者が大勢参加されている明治維新の研究班は、私にとってそのような場なのである。

行歴僧伝とイスラーム史料

——四—八世紀の中央アジア・

北インド班——

稲葉 穰

四—八世紀に中央アジアを経てインドに入竺した僧達の行法を読み進める本研究班には、考古学、言語学、インド哲学・仏教学、中央アジア史、美術史、等の分野の専門家に加えて若干の西アジア史研究者が参加している。かく言う筆者もイスラーム以降の西アジア史を専門とするものである。

玄奘や慧超のように、七、八世紀に中央アジアからアフガニスタンの北東部を経て北インドに至った入竺僧の足跡は、丁度その頃の中国史料がカヴァーする地域の西限と、イスラーム史料のその東限との境界線上を移動している。時代的にも七、八世紀は、ムスリム勢力の活発な東方進出と唐朝の中央アジアからの撤退というひとつの転換期に当たり、両側の史料を並べて利用できる最初の機会となっている。その意味で両史料を対比照合してこの時代の当該地域の事情を探ろうとする試みは意義深いものであると言えよう。実際、八世紀初頭のアラブによるスインド征服直後に同地を

訪れ、「見今大窠の來侵を被る」と記した慧超は、我々西アジア史の研究者にとっても極めて重要な同時代の証人なのである。

しかしこの意義深い試みも、いざやってみるとなかなか難しい。七、八世紀の出来事について利用できるイスラーム側の史料といえば先ずアラビア語、ペルシア語の年代記であるが、それらと行歴僧伝とは史料の性格が異なる。当然のことながら年代記は、行歴僧伝の記すような、人々の生活、習俗といったレヴェルの事柄をほとんど語らない。そのうえイスラーム側の年代記は早くとも九世紀以降に成立したものであり、時代的な隔たりを無視するわけにもいかない。そしてそれはイスラーム側のもう一つの重要な史料である地理書類においても大きな問題となる。各地の気候、物産、風俗などを記すこれらの地理書の記述内容のレヴェルは行歴僧伝と共通する。しかしこれらもまた九世紀以降に成立したものである。行歴僧伝との間の約二世紀のギャップは、その二世紀が、丁度今問題にしているアフガニスタン、北インドがイスラーム化し始める時期に当たっているだけに、大きい。結局、両側の史料を十分に検討し、同一平面で扱える事柄とそうでないものを慎重に区別しながら読み比べていくというのが、面倒ではあるが、一番確実な方法のようである。

「諸宗教の比較論的研究」班 に参加して

佐藤 吉 昭

山下正男教授を班長として一九八五年以来四年間続いたわれわれの共同研究が八九年三月で終了した。全一八名が参加したこの宗教研究は画期的なものであった。というのは、諸宗教のプロパーの研究は通常比較宗教学の領域に限定されるのが常であるのに、ここに集まったのは仏教・キリスト教の教学・神学及び思想史、イスラム・道教の文献学・思想史、古代インドの文献学、旧約学、宗教民俗学、宗教美学・美術・建築、精神病理学、またイスラム・キリスト教神秘思想、そして哲学・論理学・論理学史といった広範な分野の比較的若い専門家たちであった。程なく印刷されるであろう学報での各論文は恐らく結果的にそれぞれの専門分野に分離、収斂するであろう。しかしながら、文字として結晶化し切れなかった四年間の作業過程における毎回の発表、討議（最長五時間に及んだことも間々あった）は突拍子もなく素晴らしいもので、もともと互いに所有する専門分野は容易に他人に理解できるも

のではないのに、運命の女神の悪戯か、鋭い問いかけと鮮明な応えが咬み合うと、そこにもはや誰も手のつけられない生産の火の手が上がり、お喋りと陶酔のなかに、不可能と思われる歴史と風土、時代の異なった伝統諸宗教、そして戦後の新宗教にいたるまで、またおよそ宗教・信心の範疇に含まれ得るあらゆる現象がこのシュンポジオンの肴に供されるのであった。

ところで、分科会なしの諸宗教共同研究が成功をおさめた最大の功労は、幾分イローニッシュに聞こえようが、班長の山下教授の方法論的にきわめて巧妙なリードにあったと私には思われる。同教授は四年間の節目節目に飽くことなく、デオントロジー宗教論と宗教命題の論理分析を全員に繰返して提出された。それは宗教プロパーの研究者に戸惑いと反撥を感じさせ、それへのアンチテーゼとして、全員が教派と分野を越えて「宗教とは何か」の解明に熱意を一致しえたとも言えるからである。そして論理の視座からのデオントロジーも、野田教授の宗教の精神分析とならんで、この共同研究を通して目も心も開かれた全員によつて理解、受容されたのであるから、参加者がこのような異質性と緊張の連続の中に、個々の専門に帰帰つて余りある収穫をえたことは疑いえないのである。ここに山下教授と京大人文研に感謝申し上げる次第である。

旅

アメリカ港町雑感

山 室 信 一

一九八八年のアメリカ大統領選挙は、相手候補への非難と中傷の応酬によつて名を歴史にとどめることになったが、そのネガティブ・キャンペインの中でもとりわけ衝迫力をもったと思われるのがボストン湾汚染に関するものである。

東海岸の凋落の中で例外的に高い経済成長と低い失業率という「マサチューセッツの奇跡」をひたひたでケネディの再来を演出しようとしたデューカス民主党候補に対し、汚れきった港湾をなめるように映し出した後に、デューカスの勝利はこの汚染を全米にばらまくこと——というキャブションを重ねる手法は旅行者にすぎない外国人にさえ訴える力をもっていた。ましてボストン湾が、ボストン茶会事件でも知られているようにアメリカ独立革命の聖地とアメリカ人に目されているだけに、その効果

のほども推し測られるのである。

しかし、ボストン湾がそのように取りあげられるこの自体、逆にいえばニューイングランド地方の海岸と港町が好イメージをもつて捉えられている証左でもある。私のわずかな経験だけでも、ジョン万次郎ゆかりの地フエアヘブンにしろ、プリマスにしろ、日露戦争の条約締結地ポーツマスにしろ、ホーソンの生地セーレムにしろ、静かなたずまいをもった心穏む町であり、遠く望む大西洋の紺碧の海原はその彼方へと人を誘った頃のままだがっていた。

だが、東海岸の港町のそうした落ち着きは、一面からいえばアメリカの貧富の著しい格差の象徴であり、また他の一面からいえば東海岸が繁栄から取り残されつつあることの象徴でもある。かつての鉄鉱王や鉄道王が贅をつくしたヨーロッパの宮殿とも見紛うばかりの大邸宅が並ぶロードアイランド州のニューポートやケネディ家の別荘地として有名なケイブコッドのいくつかの町を歩けばそれを実感することは容易である。ホームレスがあふれる都会とは全く異質の世界がそこにある。

今、アメリカは東海岸のワスプが支配していた大西洋国家から西海岸の多民族競合による太平洋国家に転じているといわれる。日本への帰途立ち寄った西海岸のいくつかの港町で多種多様な人と家並みに出会い、遠くに波

頭が白く高く砕け散るのを見たとき、その大きなうねりを感じたと思ったのは果たして私の錯覚にすぎなかったのだろうか。

晋東南の寺廟めぐり

田 中 淡

昨年の三月、晋東南地方（山西省東南部）の寺廟を約三週間にわたって調査した。かつて上党と称したところで、地図で見ると太原から最南の晋城までそれほど遠くなさそうだが、絶望的な行列の末に獲得した夜行の急行（硬座）で超満員の人煙と紫煙に包まれながら、八時間半を費やした。山西省のなかでは地域的にも隔離された感があつて、そのためか一〇世紀からの古い木造建築がかなり残っている。ただ、調査報告がほとんど出ていないので、ずっと前から現地踏査の機会を切望していた。もちろん外国人非開放地区で、今回も成算があつたわけではないのだけれども、太原で行政部局への出頭を重ねた結果、なんとか許可をもらうことができた。晋城・高平・潞城・長治・長子などで約三〇箇所の寺廟を調査、このうち数件は簡単な実測まですることができたから、

まさに大成功といえる。ただ、その反面、肉体的にはかなり苛酷な条件を強いられた。三月後半といっても当地はまだ厳寒がつづき、連日、夕方になるときまつて降る雪と底冷えのなかでのフィールド・ワークは、南京の冬を経験している身にも相当こたえた。霧中の山道を疾走するジープに乗ったときは、突然出現する対向車との衝突、転落をいく度か覚悟した。

もつとも、外国人学者未踏の地ならではの収穫ということもある。県の招待所の食堂で、大勢が立ち上がつて大皿をつつき合う食事は、毎回まさしく戦争のよう。あつという間に食いぶちはなくなつてしまふ。おかげで、食後の啤酒の苦味を覚えた。饅頭、油条、粟粥に、



三仙觀正殿・天宮樓閣
(山西省晋城市金村，北宋・大觀元年[1107])

土豆、紅蘿卜、豆芽、蒜苗の炒めもの、というのが連日お定まりのメニュー。高平県東周郷人民政府が血税を浪費して開いてくれた小宴で出た素朴な水餃子とともに、これまで書物や自由ヶ丘晋風樓の味によってのみ抱いていた山西料理のイメージに大幅な修正を加えることもできた。晋城の招待所では、同行の大学院生といっしょに汚れた大部屋に泊まっていたら、許可証の呈示と同時に、私が外国人であることが露見。昼食を終えて戻ると、それまで前客の使い放しのままだった茶碗やシートなどが突然すっかりきれいになっていた。その晩、別棟の四階に移動を命ぜられ、荷物が重いから遠慮したかったのだけれど、洪々移ってみると、なんと套間。アイドル風服務員がノックして、微笑をたたえ、茉莉花茶を携えながら現われた。あまりの環境変化にしばし対応できず、スナップを撮るのも忘れてしまったのはまったくの不覚であった。

サルダーナとの出会い

宇佐美 斉

一九八八年の夏は、日本と同じくフランスでも、雨の

多い不順な気候だった。出水のため農作物もかなりの被害が出た模様だ。「腐った夏」というフランス語の表現があるけれども、なるほどこれなのか、と実感として納得がいった。

パリに着いて二か月あまりたった九月上旬、国立図書館が休みに入ったのを機に、青空と太陽を求めて、南フランスへ短かい旅行に出かけた。カルカソンヌ、ペルピニャンを経て、地中海沿岸のコリウールという小さな港町に着いた。オレンジ色の屋根瓦が美しい瀟洒な保養地であるが、テンプル騎士団の城や長石の鉱床によって、その名を知られている。

翌日曜日はすばらしい快晴だった。空と海とを望む高台のレストランで昼食をとったあと、港のまじかにある、町の中心部の広場へ降りてみると、にぎやかな人だかりがしている。音楽に合わせて、男女が交互に手を取りあって輪をつくり、かかとをほとんど地面につけないで、優雅にステップを踏みながら踊っている。浮かれ騒ぐといった風ではまったくなくて、全員が厳肅な面持で円の中心を正視しており、どこことなく神秘的な雰囲気が漂っている。厳しく抑制された情熱の渦が次第に波紋を描いて周囲に拡がっていくような、清楚であってしかもなまめいたところのある踊りだった。思わず一時間あまりもその場に立ちつくしてしまった。



コリウールの広場でサルダーナを踊る人々

八つほどある輪のうちでとりわけ見事なハーモニーを示していたのは、赤と白で衣裳を統一したグループだった。舞踏靴とスカート（男はズボンの腰に巻きつけた^{いてち}）が鮮かな緋色で、他は純白の出立である。カタロニア人の帰属意識の象徴ともいえるべき、サルダーナと呼ばれる民族舞踏であることを、見物人のひとりが教えてくれた。伴奏をしているのはコブラと呼ばれる専門の楽団で、フルート、腕にくくりつけた小さなドラム、高音と中音のショーム、トランペット、トロンボーン、フリューゲルホルン、そしてコントラバスの、約十名の編成である。

帰国してから、いくつかの事典類にあたってみて驚いた。なんと遠く古代ギリシアに起源を持つ太陽讃歌の舞踏との説明だった。踊りの輪は、暁から夕べにいたる日輪の消長をかたどるのだという。太陽にめぐまれることの少なかった夏の終りのささやかな旅行が、このようないわれのあるサルダーナとの出会いに彩られたことに、私の心はあらためてふかい満足を味わった。

書いたもの一覧 一九八七年二月—一九八八年二月 (五十音順) ●は単行本

・浅田 彰

手帖 する 一月—七月

空間の爆発 樋口謹一編「空間の世紀」 筑摩書房 三月

奇跡の映画 リュミエール 一一号 三月

Infantile Capitalism and Japan's Postmodernism. *The South Atlantic Quarterly*, summer 1988

●天使が通る (島田雅彦と共著) 新潮社 一一月

・飛鳥井 雅道 現代の理論 一〇月号

天皇「制」をこえる権威と権力

・荒井 健 現代の理論 一〇月号

●錢鍾書「結婚狂詩曲(開城)」(共訳)上下 岩波書店 二—三月

錢鍾書の「結婚狂詩曲」を訳出して 毎日新聞(夕刊) 五月一日

・稲葉 稔 西南アジア研究 二九号 九月

ガズナ朝のハーシブ

・岩熊 幸男

Instantiae: An Introduction to a Twelfth Century Technique of Argumentation. Argumentation I (Dordrecht/Boston, 1987)

・宇佐美 斉 解説・清岡卓行著「アカシヤの大連」(講談社文芸文庫)

講談社 二月

落日—あるいはデカダンスの詩学 「ボードレール・詩の冥府」(京都大学人文科学研究所研究報告・多田道太郎編)

筑摩書房 三月

ボードレール「悪の花」註釈(上、中、下)(共著)

平凡社 三月

Le Rôle de l'écriture dans la poésie japonaise moderne. *Zin-bun* 22 (1987)

・梅原 郁 墨 二月

泉州の天下第一橋—蔡襄と萬安橋碑の背景—

宋代の形勢と官戸 東方学報 京都六〇冊 三月

福建の石刻—九日山—(一) (五) 日本書道新聞 三—五月

福建の石刻—武夷山—(一) (五) 日本書道新聞 五—七月

不可解な学士院の「授賞延期」 朝日新聞(夕刊) 六月二〇日

●「漢書」地理志・溝洫志訳注(東洋文庫四八八) 平凡社 七月

・奥村 弘 相生市 二月

●相生市史・第三卷(共同執筆)

・桑山 正進 第九回南アジア考古学国際集会について

西南アジア研究 二七号 一月

ガンダーラ「アジアの仏教名蹟」 雄山閣出版 一二月

・小 南 一 郎

関於《離騷》的遠遊、特別是第二次出游的意義（白子明訳）

河北師範学院學報 一九八七年第四期 一二二月

王度「古鏡記」をめぐる——太原王氏の伝承——

東方學報 京都六〇冊 三月

言葉に対する才能

湖国と文化 第四四号 七月

津田博士と「老子」

「津田左右吉全集」二五卷月報 岩波書店 九月

道教信仰と死者の救済

東洋學術研究 二七卷別冊 十一月

・阪 上 孝

空間の政治経済学 樋口謹一編「空間の世紀」筑摩書房 三月

いまこそ求められる《塔の視点》 毎日新聞 四月二六日

世論の觀念について 経済論叢 一四一卷六号 六月

・佐々木 克

書評・田村貞雄著「ええじゃないか始まる」

日本史研究 三〇六号 二月

戊辰戦争と近代日本

「イラストでみる戊辰戦争」 新人物往来社 六月

書評・メアリー・フレイザー著・横山俊夫訳「英国公使夫人の見た明治日本」

日本史研究 三二五号 十一月

・佐 原 康 夫

定県漢墓出土古佚書等「中国書道全集」一卷 平凡社 一〇月

・新 保 敦 子

現代中国の教育体制改革——中国の高等教育成人教育——

季刊中国研究 一〇号 二月
現代中国の家族問題 「現代家族と社会教育」 日本社会教育学会 一〇月

・鈴 木 啓 司

ロベール大仏和辞典（共同執筆） 小学館 一二月

・曾 布 川 寛

龍門石窟における唐代造像の研究 東方学報京都六〇冊 三月

麒麟図像学ほか 江上波夫編「聖獣伝説」 講談社 四月

・田 中 淡

中国造園史研究の現状と問題点 造園雑誌 五一卷三号 二月

書評・講造力学への里帰り 田口武一著「建物とストレスの話」 建築と社会 二月

●編集・解説「村田治郎著作集・三・中国建築史叢考・仏寺・仏塔篇 中央公論美術出版 三月

A Report on the INTERNATIONAL CONFERENCE ON THE HISTORY OF SCIENCE IN CHINA: 1987 Kyoto Symposium, *Historia Scientiarum* No. 34 三月

中国建築・庭園と鳳凰堂——天宮樓閣——神仙の苑池——「平等院大観・第一卷・建築」 岩波書店 八月

Newly Unearthed Pictorial Materials on Cookery in Ancient China. Abstracts: The Fifth International Conference on the History of Science in China. University of California, San Diego 八月

門（中国）「日本大百科全書」二三卷 小学館 九月

中国科学史国際会議…一九八七年京都シンポジウム

科学史研究 一六六号 九月

・田 中 雅 一

エヴァンズ・プリチャード／レヴィ・ブリュール／聖なるもの
／カニバリズム／エスニシティ／フォークロア／葬制／祖先
崇拜／トートেমイズム 今村仁司編「現代思想を読む事典」
(講談社現代新書) 講談社 一〇月

・谷 泰

マニキュアとベディキュア 民博通信 三九号 三月

●ピーター・バーク「ヨーロッパの民衆文化」(共訳)

人文書院 六月

北方ツングース・狩猟民の世界と心 「興安領をゆく」

日本放送出版協会 一〇月

・礪 波 護

宮崎市定「木米と永翁」(中公文庫) 解説 中央公論社 二月

●馮道——乱世の宰相(中公文庫)

中央公論社 三月

●一八五〇年の世界(朝日百科・日本の歴史99、共編)

朝日新聞社 三月

●一九〇〇年の世界(朝日百科・日本の歴史110、共編著)

朝日新聞社 五月

●一九四五年の世界(朝日百科・日本の歴史112、共編)

朝日新聞社 八月

宮崎市定「大唐帝国」(中公文庫) 解説

中央公論社 九月

「世説新語」の周辺(井波律子「世説新語」)

角川書店 九月

ニューホフ「東インド会社派遣中国使節紀行」・キルヒャー
「中国図説」(神田饒・倉博士寄贈図書善本書影)

大谷大学図書館 一〇月

黄河文明と長江文明(朝日百科・世界の歴史1)

朝日新聞社 一一月

殷周王朝の盛衰(朝日百科・世界の歴史6)

朝日新聞社 一二月

The Sui Dynasty Inspection of Countenances and the Early
T'ang Fields of Maintenance, in *East Asian Institute Occa-*
sional Papers 2, University of Copenhagen, 1988.

Policy towards the Buddhist Church in the Reign of T'ang
Hsuan-tsung, in *Acta Asiatica* 55, The Toho Gakkai, 1988.

・富 永 茂 樹

複製ばかりの美術館

京都新聞 三月五日

廃墟の一八世紀——あるいは甘美な憂鬱の夢について

樋口謹一編「空間の世紀」 筑摩書房 三月

書評・鮫島伸子著「髪の社会史」

社会学評論 第三九卷一号 六月

・永 田 英 正

莊子に学ぶ

翔 一二号 一号

●漢書食貨・地理・溝洫志(東洋文庫、共訳)

平凡社 七月

解説・老子甲本と巻後古佚書、老子乙本と巻前古佚書

「中国書道全集」 一卷

平凡社 一〇月

・中村 賢二郎

●ピーター・パーク「ヨーロッパの民衆文化」(共訳)

人文書院 六月

・狭間 直樹

記念される孫文と孫文研究 竹内実編「転形期の中国」

京都大学人文科学研究所 三月

民国初年における労働尊重觀念の形成

「日本文化と東アジア」 東北大学日本文化研究施設 三月

“三大政策”と黄埔軍校

歴史研究 北京 一九八八年二期 四月

義和団の乱と辛亥革命(朝日百科・日本の歴史110)

朝日新聞社 五月

規範性認識と歴史事象等

の記録

「五・四」運動研究史シンポジウム

中央大学人文科学研究所 七月

同右

季刊中国研究 一三〇号 一〇月

毛沢東の統一戦線論

毛沢東思想学院ニュース 二五五号 一〇月

二つの世紀末—ドネリの空想小説と現在

毎日新聞(夕刊) 十一月一九日

・林 巳奈夫

中国古代の玉器 琮について

東方学報 京都六〇冊 三月

・平田 由美

評釈「二日物語」(上)

人文学報 63号 三月

・藤井 讓治

江戸幕府老中制の形成(3)

人文学報 63号 三月

●敦賀市史通史編下巻(共著)

・藤田 隆則

「のる」ことの作法—能の専門用語から見えるもの

季刊人類学 一九卷一—二 二月

ノリ「コミュニケーション事典」

平凡社 八月

●鳥になった少年(共訳)

能空間における音のあり方

ライフサイエンス 一二月号 八月

・船山 徹

書評・川田順造著「聲」 季刊人類学 一九卷三—四 八月

Bhava and Svabhava in Dharmakīrti, Journal of Indian and Buddhist Studies Vol. xxxvi No. 2

・古屋 哲夫

兵事と行政「福井県史しおり」資料編12上

福井県 三月

ひとつの転機「歴史学研究」復刻版月報18

四つ 四月

満州事変にいたる侵略勢力の形成過程「日中戦争と日中関係」

原書房 九月

・前川 和也

The management of domain land in Ur III Umma: A study of BM 110116, *Zinbun* 22, 1987 (pub. in 1988).

New texts on the collective labor service of the erin-people of Ur III Girsu, *Acta Sumerologica* 10, 1988.

麦作農業の生産力(山本他編「西洋の歴史」[古代・中世篇])

ミネルヴァ書房 七月

粘土板記録の誕生—シュメールとエブラの行政文書—(朝日百科・世界の歴史2)
朝日新聞社 十一月

・三浦秀一

彰紹升の思想
東方学報 京都六〇冊 三月

・夢谷邦夫

明清時代の日用百科全書について 「一八、一九世紀節用集の政治社会学的研究」—昭和六十年一般研究(B)報告書 八月

中華人民共和国における道教研究の現況について

東方宗教 七二号 一〇月

道教における天界説の諸相 東洋学術研究二七巻別冊 十一月

・村田裕子

一九三〇年代・ハルビン—「跋涉」を中心に— 竹内実編「転形期の中国」
京都大学人文科学研究所 三月

・森時彦

書評・中央大学人文科学研究所編「五・四運動史像の再検討」

東洋史研究 四七巻二号 九月

・山下正男

花と宇宙
CEL 六号 四月

・山田慶兒

扁鵲伝説
東方学報 京都六〇冊 三月

●黒い言葉の空間—三浦梅園の自然哲学 中央論社 四月

●飛行機・車・船(朝日百科 日本の歴史118、編著)

・山室信一

書評・早稲田大学大学史編集所編「小野梓の研究」

日本歴史 四七五号 一二月

●編集「明治期社会科学翻訳書集成」(マイクロフィルム版)

ナグ書房 一二月

読書寸評・「読書の現在」

社会科学の継受と東アジアの学問 シンポジウム「日本文化と東アジア」
東北大学日本文化研究所研究報告 三月

近代の日本文化研究と東アジア 同右 三月

●学問と知識人「近代日本思想大系・第一〇巻」(共編)

岩波書店 六月

・山本有造

●幕末・明治の日本経済 「数量経済史論集4」(尾高煌之助と共編)

日本経済新聞社 三月

幕末・維新期の通貨構造 同右

台湾・朝鮮の資本形成 溝口敏行・梅村又次編「旧日本植民地経済統計—推計と分析—」
東洋経済新報社 七月

「帝国」内貿易マトリックス(溝口敏行と共筆) 同右 七月

台湾・朝鮮の貿易と国際(域外)収支(溝口敏行と共筆) 同右 七月

一九八八年七月中国東北地区における二つの学術討論会への参加記
近きに在りて 一四号 十一月

・横山俊夫

実用百科の文明学

アステイオン 7 一月

Setuyōshu and Japanese Civilization, Sue Henny & Jean-

Pierre Lehmann, eds., *Themes and Theories in Modern*

Japanese History, London: Athlone

三月

●英国公使夫人の見た明治日本(メアリー・フレイザー原著、ヒ

ュー・コータツツイ編、横山訳・解説)

淡交社 三月

研究報告書(タイ国における日本研究)/Report to the JSPS
and the National Research Council of Thailand (Study of
Contemporary Japanese Studies in Thailand) 日本学術振
興会およびタイ国学術審議会宛提出 四月

Internationalization of the Japanese (with Yasuyuki Kurita et
al.), *NIRA Research Output*, Vol. 1, No. 1 五月

●一八、一九世紀節用集の政治社会学的研究(編著、文部省科学
研究費補助金成果報告書) 八月

国際化と日本研究—ナショナル・スタディーズを越えて

RIRI流通産業 九月

京都における人の国際化

京都新聞 二月六日

挨拶 会誌 36

財団法人竹中育英会 二月

オールコック/ミットフォード 伊東俊太郎編「世界から見た

感銘を受けた本

・新保敦子

鄭念「上海の長い夜」(原書房)

日本」(エナジー小事典11号)

エッソ石油 二月

・吉川忠夫

二十年前的こと 「足利惇氏著作集」第三卷

東海大学出版会 二月

●弘明集・広弘明集

「大乘仏典—中国・日本篇4」

解題・「笑道論」訳注

中央公論社 三月

「禅林僧宝伝」卷四・金陵清涼益禅师章訳注

東方学報 京都六〇冊 三月

料篇 京都大学人文科学研究所 三月
陶淵明の「戒子書」をめぐって 鑑賞中国の古典「陶淵明」

王羲之と許邁—または王羲之と「真詔」— 角川書店 五月
陳の後主を誤殺す—欧陽詢と江総— 書道研究 八月

道教の道系と禅の法系 東洋学術研究 二七巻別冊 八月
脇は席に至らず—全真教と禅をめぐって— 臨時増刊 八月

禅文化研究所紀要—一五号(入矢義高教授喜寿記念論集)—二月
胡蝶の夢 「中国文学歳時記」春(下) 同朋舎 二月

元行沖とその「釈疑」をめぐって

東洋史研究四七巻三号 二月

「中外日報」社説 十二回 四—二月

東洋史研究四七巻三号 二月

・鈴木啓司

荒俣宏「帝都物語」(角川書店)

人

文

第三五号

一九八九年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

中村印刷株式会社

非売品